

自主性について

渡辺美知夫

ひとの真価は、その人の自主性が、どれだけ身についているかによって、決まる。自由人とは、自主の人ということである。傍目には賤しい生き方としか見えない場合でさえも、その人が自主的に生きているなら、人生の成功者と言ってよい。自主性は、人種、境遇、身分、学歴、職種などを超えて、最高の価値である。貴族に生まれついても、その生活に自主性がなければ、只の操り人形に過ぎない。むかし古代ギリシャでは、奴隷身分の人の中に、すぐれた生活者がいて、重く用いられた例も幾つかあるようであり、わが国にも妙好人と呼ばれる、見事な生活者が、世に隠れているが、相当数いると聞いている。聖書には、マグダラのマリヤという人物のことが出てくる。ルカによる福音書七章三六節以下によると、マグダラのマリヤは「罪の女」であって、パリサイ人は彼女を蔑視している。その彼女が「泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の

髪のもでぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。」(口語訳)イエスはそれを拒むどころか、「あなたの罪はゆるされた」と言った、とある。私のはじめはこの部分を読んだとき、マリヤの罪が許されたというのは、彼女が「罪の女」即ち娼婦であることを、やめたということだろうか、と疑った。私は今もって、娼婦であることと、「救われる」こととは、別もののように思われてならない。娼婦であることが、道徳的によくないことだからといって、直ぐさまそれをやめてしまえるほど、人生は甘くない。人生には倫理道徳では割り切れない、深刻な矛盾が、常に付き纏っている。それだからこそ、倫理道徳を超えた宗教に、存在理由があるのではあるまいか、私はそう思っている。

私にF君という二廻り若い友がいた。彼は昨年初夏の頃、癌で六十歳に充たぬ生涯を終えた。これからという時であった。ここにも人生の、合理的には解き難

い謎があると、私は思う。それは兎も角、そのF君が学校を卒業して就職した先は、専攻の金属工学に基づく会社であった。ところが間もなく彼は、その会社が夜を日に継いで、フル操業で生産しているのが鉄条網であり、それが朝鮮戦争の戦線に、怒濤のように送り出されているという事実を知った。彼は直ちにその会社を辞めた。戦争に協力したくないというのであった。彼は意気揚々と私にその経緯を告げに来た。私はまず彼の勇氣ある決断を讃めた上で、君は元高級軍人の息子で、裕福だから、すぐにもそうした決断ができたのだが、辞めようにも辞められない事情の人も、少なからずいるのではないか。その辺のことも考えておくがよい、と言った。彼はショックを受けた様子で、それ以来私どもの友情はさらに一層深まったことであった。

ある集団に帰属することで、その集団に自分の自主性を預けて、得意になっていいる人がいる。こういう人に限って兎角、自分の属する集団の威を借りてひとを見降し、虎の威を借るキツネになり易い。当人はそれで一簾偉くなつた積りでも、それは実は最底の生き方である。救い難い。傍迷惑である。本人が己が姿の醜

くさに、一向気が付いていないところが、なんとも哀れである。いわゆるエライ人の中に、この種の人間を、われわれは眼ざとく検証する必要がある。

私は生まれた頃は大変な虚弱児で、とても五歳までは保つまいと、よく言われたものだ。母が折ある毎に呟いたものであった。青年期になつても、健康とは縁が薄く、とりわけ肩凝りに悩まされた。父や母がよく按摩を呼んでいたから、肩凝りは按摩が治すものと思ひ込んで成人した。それが昭和二十年五月、丙種合格の私にも赤紙が来て、陸軍輜重二等兵にされると、毎朝起き抜けに、有無を言わず体操をさせられる。間もなく氣付いたことは、いつとなく肩凝りを忘れていいるということであった。そこで終戦後は毎朝、自称「二等兵体操」なるものを編み出して、実行するようになった。爾来肩凝りという症状は、私の生活からすっかり姿を消して、今日に及んでいる。つまり肩凝りも人頼みでは治らない、健康管理も医者や薬など、外なる「權威」に頼っていは、ダメなのだと思つたということである。勿論医者も薬も、健康の自主管理に、重宝な手段であることに異論はないが、根本は自主管理でなければならない。

知り合いの奥さんに、医者通いが趣味としか言いよらない人がある。あるとき行きつけの病院の紹介で、もう一つ別の病院に行くことになり、医者からカルテの入った封書を預けられた。その奥さんは好奇心から、その封書の中味を覗いてみて、驚いた。この患者には格別の異状はないのだが、本人は一簾の病人のつもりでいないと気が済まないらしいので、よろしく、という意味のことが記されていたのである。その奥さんはカンカンに腹を立てたところのだが、その後も病院を次々と渡り歩いているところを見ると、本人は相変らず病人のつもりらしい。最近は気の毒にそろそろ呆け症状が現われ始めている。当面の問題に即して言えば、主体性を他人に預けるから呆けるのだ、と言いたいところである。老人の病院通いと薬漬けで、国民健康保険が大変な赤字続きで、困っているそうである。現在の年寄りには今更打つ手はないのかもれないが、将来老人になる世代に、健康の自主管理を徹底させ、体得させれば、保険の赤字は、解消はしないまでも、目に見えて減少するであろう。これが本人たちのためでもあるのだから、それこそ抜本的で、健全な方策というものである。

ソ連が人工衛星スプートニクを、世界に魁^{まが}けて打ち上げたのは、年表を繰ってみると、一九五七年秋のことであった。私はある日、さる大学のキャンパスの芝生に立って、その物体がオレンジ色に輝やきながら、夕焼空を北から南へ動いて行くのを見守ったものであった。一緒に空を見上げていた女先生は、無邪気に感嘆の声をあげていたが、私の心境はもう少し複雑であった。一体ソ連はこの衛星の打ち上げに成功した効果を、今後どのように展開させることになるのか。第一に考えられるのは軍事目的に使うことで、この面で米ソの競争が一段と激化することは目に見えているが、平和目的の方は今のところ見当もつかないな、という気がした。次の瞬間私の脳裡に突然浮かんだイメージは、人工衛星が引張るトロッコの列であった。そのトロッコには、なんと地球上で持て余した粗大ゴミが詰め込まれているのである。行先は月である。月を地球のゴミ溜めにするなどとは、なんとも気の咎める話ではあるが、兎も角それが突嗟に浮かんだアイデアであった。それから数年後、今度はアメリカが月面着陸に成功することになる。

産業革命によるテクノロジの急発展によって、さ

さまざまな人工的機器が矢継早に生み出され、われわれはその余慶にあずかることを、めでたいこととして謳歌して来たが、今や余慶は余弊に転化しつつあり、このままでは人類は、粗大ゴミに陸地を占領されて、住むところを失い、海中投棄の結果は海水の水位が上って、まさに「日本沈没」の惧れすらなしとしないことが、私の重大関心事になりつつあったのである。自然現象には、廃棄物処理の巧妙な自浄作用があるけれども、人間の作り出す物質にはそれが無い。人間が作り出したモノについては、廃棄処分の方法までも、人間自身が自主的に考え出さなければならない。今迄のように、何となく自然に負ぶさって済むことではなくなってきた。ここでも人間の自主性が、不可欠の問題になるわけである。

日本人の発想法の一つに、「水に流す」ということがある。私の少年時代には、七夕の翌朝近所の川に行くと、色とりどりの短冊をつけた青竹が何本も投げ込まれていて、岸に引掛かっったりしていたものだが、その頃はやがて一雨降って、竹は「自然に」海に運ばれて、何とか片が付いていたものなのであろう。昨今は「水に流す」だけではことが済まなくなっている。私

の少年時代には、屋敷内に内井戸と外井戸があって、水は使い放題であったが、この頃は「湯水のように」という言葉も廃語になろうとしている。そのうちに空気も日光さえも、只は使えない世の中になるのではないかと心配である。石炭は掘り尽くされ、石油も先が見えている。生活物資に悉く金がかかるはまだしも、いくら金を積んでも手に入らない時代が、目の前に迫っている。生活百般の自主管理が焦眉の急である。

私はひとところ家族を連れて、石廊崎の近くへ海水浴に出掛ける数年間があった。初めて行った頃は綺麗な海で、心ゆくまで泳ぎを楽しみ、岩場では潜ってタコと一緒に泳いだりもした。ウツボが穴から首をもたげているのに出会うことも、度々あった。ところがやがて、磯がすっかり、沖で投棄されたらしい船の廃油に、ベットリと汚されている年があつて、ガツカリさせられ、その翌年には、今度は海面一面にビニールが漂っていて、不愉快な思いをした。これでは船の航行にも支障が出るのではないかと思った。その後はパツタリ出掛けるのを止めてしまった。それからやがて釧ヶ浦や琵琶湖で、生活廃水の問題が表面化し始めた。最近ではチェルノブイリの爆発事故や酸性雨が、由々し

い問題になっている。事は世界的な広がりを見せ、人類全体の問題になって来た。この辺で徹底的な発想の見直しをしないと、取返しのかぬことになりかねない。

高度成長とやらが始まった頃、車を飛ばして行く先々、道端の桜並木が満開であった記憶があるが、私は伊豆半島の西北の肩の断崖に佇んでみた。駿河湾を距てて田子ノ浦の海岸が、真正面に見えた。その向こうには勿論富士の高嶺が、秀麗な姿を見せていた。ところが、田子ノ浦の海面は横長に、真っ茶色に濁っていて、湾を距てて立つ私の鼻に、なんとも不快な、刺すような悪臭が漂って来るのであった。『田子ノ浦ゆ打出でてみれば真白にぞ』ではなくて「茶色にぞ浦辺の潮は濁り果てぬる。」という始末であった。私は痛切な思いを禁じ得なかった。それから数年、その間に例の大学紛争の騒動が挟まるのだが、私は再び同じ断崖に出掛けてみた。そのときは悪臭は消え、田子ノ浦の磯辺も、見たところ元に戻って、青々と見えた。大学紛争で、学生達の示した抵抗力に促されてのことと私には思えるのだが、学生運動が市民運動へと拡大、移行した結果、市民の集団が海水汚染の原因となってい

る、製紙会社の汚水垂れ流しに、抗議行動を起こしたのだそうである。その会社の社長は大いに憤慨して怒鳴ったという。「何を吐かすか。お前らが今日あるのは、われわれが懸命に企業活動をして来た結果ではないか。その恩恵に感謝するどころか、文句をつけに、しかも束になって押し掛けるとは、ケシカラン」と。数年前までならここで話はお仕舞になったかもしれないが、今や時代は移っていた。市民団は引き退らなかつた。悪臭を放つ濃厚な汚水が眼前に現実にあるわけなので、社長は遂に押し切れなくなって、ヨーロッパへ「視察旅行」に出ってしまったという。一ヶ月余り経って帰って来た社長の物腰は、すっかり丁重になっていて、垂れ流し防止の策がとられることになった、ということである。この社長には、産業優先、企業第一は当然という思い込みがあつて、市民団に詰め寄られて漸くその辺の反省があつた、というわけである。こういう機縁に恵まれた、この社長は、むしろ仕合わせ者であつたと言わなければならぬ。現在もおお、内心では威張りくさり、ふんぞり返っている企業人は、少なからずいそうである。立場上、知らず知らずのうちに醸成された思い込みから、自己を解放する努

力が、人類生き残りのために、絶対に必要であると言つても、大袈裟とは言えない事態に、今われわれは差しかかっている。とは言つても、なにも生産活動の大切さを否定しているわけではない。九州有明湾岸の惨状を思い起こすまでもなく、後始末もキチンとして貰わないと、大変なことになると、言っているのである。これもまた、後に述べるように、ホモ・サピエンスが自然から抜け出たために生じる責任の一つである。

ひとは自分の甲羅に似せた穴しか掘れない、というのが、私の口癖になっている。「いわしの頭も信心から」とは、いろはガルタの文句である。鰯の頭が神であり、仏であると思ひ込んでいる人に、いきなり、いや、それは神や仏ではなくて、ただの鰯だと言つてみたところで、その人はおいそれとは得心しないかもしれない。人にはそれぞれの境遇や生活条件に由来する、思ひ込みというものがある。鰯が仏だというもの、一つの思ひ込みであり、アラアクバルというのも、自主性がなければ、もう一つの思ひ込みになってしまう。人にはそれぞれに、意識下に根を張った思ひ込みがあって、日常われわれはそれに気付かない。そして

自分が堅固不壊くわくの地盤の上に立っていると、自惚おぼれている。

やくざは自分の属する集団の、鉄の規律を至上の徳と心得、これを犯す者を容赦しない。むかしヨーロッパ中世の聖職者達は、己れの奉ずる神学を絶対視して、それを規準にひとを裁き、その結果無辜むこの人々が命を絶たれさせた。この種の思ひ込みの非を指摘したのが科学であったが、科学者もまた、ややともすると、自己の立場を至上とする思ひ込みに陥るきらいなしとしない。現実問題としては、真理は常に相対的であつて、絶対性はないことを啓示したが、外ならぬ科学であつたのに、である。

最近われわれが等しく心衝たれた事件が、中国で起こつた。天安門広場の虐殺事件である。しかもそれはペレストロイカの提唱者本人が、何十年ぶりで中国を訪れた、正にその直後のことであつた。これは近來稀な、悲痛なアイロニーであつた。ゴルバチョフは、ソ連の共産体制に対する、教条主義的な思ひ込みが、ソ連の未来を拓く力を失わせてしまったことを指摘して、この際その思ひ込みから自らを解放することを、人々に勧めているのだと、私は思う。ところが鄧小平

一派は、それとは正反対の愚挙を敢てした。独裁政権の末期的症状の常として、群衆を武力制圧して、多数を殺傷しておきながら、死者は一人もなかったなどと、鷲を鳥と言いくるめようとする。文化大革命とやらの二の舞である。私は学校を出てすぐに、当時の関東州、つまり中国から日本が租借していた地域にあった学校に就職し、そこに終戦後まで留まっていたので、体験上、中国人はお人好しの日本人より、遙かに大人だと思わせられていたのだが、今回の事件ですっかり期待を裏切られた。それにつけても思い込みの弊害を、又しても強く感じたことである。

そういえば終戦直後、ソ連の戦車兵団が、私の住まいのあった旅順にも進入して来て、昼は日本人宅を掠奪してまわり、夜は見当をつけた家に上りこんで、酒を要求して一しきり遊んで行くのには、酔うと人柄がガラリと変る者が多くて、怖い思いをさせられたが、そんなとき、何彼と品物を物色しているうちに粗末なもの、気に入らぬものを取り上げると、きまって「キタイー！」と叫ぶのが面白かった。つまり、つまらぬものは「中国人に呉れてやれ！」と言うのである。同じ戦勝国の筈の中国に対しては、何となく異和感があ

るらしく、こっぴどくやつけた筈のわれわれ日本人に、逆に親しみを感じているらしいのが、よく判った。私は旅順在任中に、ソ連の共産革命を逃がれて、旅順に住みついていた、少数のいわゆる白系露人とも接触したが、その折々にロシア人とはなんて気のいい、無邪気な、素直な人たちなんだろう、と思わせられたものであった。こんなに善良な人たちが、どうして独裁者や権力者にいじめ抜かれる歴史を綴って来たものなのか、不思議だなど思う一方、こういうお人好しであればこそ、権力欲の塊りのような奴にかかると、手も足も出なくなるのかも知れないな、とも思わせられた。

天安門広場で、中国の学生たちが見せた見事な動員ぶりは、私には相当期間にわたる事前準備があったに違いない、と思われた。武装している相手を極力刺激しないように、ことばも行動も慎しもうとしている様子が、アリアリと見てとれた。にも拘らず彼等は、アツという間に圧しつぶされてしまった。いかに優れたフィロソフィーも、権威主義というもと木に接ぎ木されると、やがて必ず行き詰まり、破綻するものなのだ、と思わせられた。マルクスにとって共産主義思想

は、亡命先のイギリスの、産業革命さなかの社会で、労働者の置かれた悲惨な状況を眼のあたりにして、自主的に、独創的に編み出された、革新的な思想体系であったのであろうが、（そう考えなければ、マルキシズムが、これほど長期にわたって、世界的に信奉された理由が説明できない。）彼の思想のヒューマニスティックな面は、年と共に削り落され、スターリンがライバルのトロツキーを、国外に放逐し、やがて死に至らしめると共に、もと木の権力欲が姿をあらわにし、マルキシズムはそれをカモフラージュする道具となり果ててしまった。「万国の労働者よ、団結せよ」（「共産党宣言」結語）という標語の暗示する、一党独裁体制が、スターリンのエゴイズムにすり替り、粛清に次ぐ粛清が行われた頃のことを想い起こすと、今もなお背筋の凍る思いがする。スターリン時代の末期には、彼は芸術や言語学の分野にまで、口出しするようになっていた。潜越沙汰の典型である。これに比べると、中国で幾十万の群衆が、毛沢東を讃美して、「毛沢東語録」という赤い小冊子を、一齋に打振っていた光景などは、いっそ子供っぽく、頬笑ましくさえ感じられる。ソ連や中国をはじめ、共産圏の国々では、何かと

いうと時の権力者のバカでかい肖像がミコシのように担ぎまわられるのも、私には苦々しいを通り越して、噴き出したくなる思いである。共産中国になった途端に、中国には蠅が一匹もいなくなったと聞かされた時も、共産主義的ウソの例が、また一つふえたと、遣り切れない思いがしたものであった。付和雷同に主体性はない。

私はバック旅行で、二回モスクワとレンングラードに行ってみたが、その都度、終戦直後大連で仮住まいをしながら、引揚船に乗る順番を漫然と待ち暮らした、一、二年間を思い出さずにはいられなかった。ソ連が背後に控えた共産中国政府の下での生活は、市場に買出しに行くにも、ソ連の軍票をギッシリ詰めこんだリュックサックを背負って行かねばならないほどのインフレで、おまけに人混みの中では軍服姿のソ連兵の手が、ヌットリュックサックに伸びてくるのにも、気を付けなければならなかったが、それは兎も角、いつ誰が何を密告するか判らない、街を歩いているのも、いつ何時中国の兵士の気紛れな銃撃的になるかも知れぬといった、陰惨な、落着かぬ日々であった。その同じ憂困気が、終戦後年を経て、観光旅行で訪れたソ

連の街々にも、私には感じられた。例えば、観光バスに乗込んでくるガイドは、大抵二人連れで、運転手を加えた三人が、お互を監視し合っているらしい気配があった。一休みしているとき、偶々ガイドが一人きりになったので、試しにポールペンやティッシュペーパーなどを、そつと差出してみると、彼あるいは彼女は、必ず辺りを見廻して、同僚の監視の眼がないことを十分確かめた上で、いかにも嬉しそうに素早く品物を受取って仕舞いこむのであった。ホテルに帰り着くと、部屋に来るボーイも必ず二人連れであり、これも偶々一人だけになった時に、同様の実験をしてみると、その反応は前記と全く同様であった。一度など私共の添乗員のアタッシュケースが、日本からモスクワの空港に着いた途端に行方不明になり、数日後日本に帰る飛行機が発する直前に、漸く返されて来た。内容は勿論詳しく調べられた上でのことである。添乗員が格別慌てる様子もなかったところを見ると、過去にすでに同様の経験があったのかもしれない。クレムリン宮の前の広場に佇んでいたとき、猛烈なスピードで駆け抜ける、黒塗りの大型車を、異様に思っただけでみると、政府の高官が乗っていたのであろうというこ

とであった。要人は一般の電話帳には、住所も番号も載せていないとも聞いた。秘密警察の眼が、どこで光っているかも知れないとのことで、私は終戦直後の大連と少しも違わないと、ウンザリさせられた。

そのソ連に今ペレストロイカという現象が起こっている。一党独裁で、半世紀以上にわたって甘い汁を吸う癖のついた官僚組織が、手段を尽してこれに抵抗しているらしいが、ソ連のこの「維新」が、途中で腰くだけにならないことを、祈らずにいられない。この新しい動きが、早速共産圏諸国や諸地方に、解放運動を呼び起こしているのも、私には自然の成行きと、肯ける。人間は自主的に生きなければ、生き甲斐の感じられない動物にまで、「進化」して来ているのだ。権威主義はもはや世界中から姿を消すべき時が来ているのである。

祖國を棄てて逃げ出すなどということは、ついこの間までは考えても実行できなかった。それが今では万単位の人々が、それを実行するようになった。権力者が人民を強制移動させたり、国外に追放したりという、従来ヒットラーやスターリンが屢々やったのとは、いわば方向が逆である。これはまた、人類

の移動が、国の境を越えて、グローバルになってきたというところで、やはり人類の一種の「進歩」と捉えるべきことなのである。ベトナムや中国からも、今現に、外ならぬ日本へ、何千という数の人々が流れ着きはじめ、事は対岸の火事ではなくなっている。この新しい事態に、日本政府はどう対処しようとするのか。いつものことながら、現政府はこの事態に処する哲学があるとは見えない。ここ数十年來、日本の国会のしていることといえは、ロッキード、リクルート、パチンコと汚職に次ぐ汚職の後始末の、往生際のわるい、泥のなすり合い以外に何があるというのか。自分たちの仕出かした不始末の尻拭いを、国民の税金を使って、延々とやり続けるとは、何たる醜態かと、議員の誰かが言いそうなものと思うのだが、自分たちはロクに税金も納めずに、消費税とやら物品税とやら、他人から取り上げることばかりうつつを抜かすような、特権意識にドップリ浸った状態では、そんな道理には一向気が付かぬようになるものなのであるうか。貿易の問題など、経済一般について、アメリカから何の彼のと、内政干渉とも思えることを、矢継早にこわもてに談じ込まれていることも、これは無関係では

ない。日本の精神的「鎖国」を突き崩すには、これしかない。先方は焦立っているのである。二十世紀の黒船である。

人類がホモ・サピエンス、つまり賢い生きものである所以は、人類が自然に埋没していた状態から、抜け出すことができたことにある。人類は自然に埋没していた状態から、つまり動植物などが現在もある状態から、長い時間をかけて、徐々に抜け出すことができた。動植物同様、自然の一部である性質はそのまま持ち続けながら、人間はその自然から離れて、自然を對象化し、客観化する能力を育ててきた。図式的に記せば、家族―部族―民族―国家―連邦、君主・貴族政治―封建政治―ブルジョア政治―民主政治、狩獵期―農耕期―科学工業期、といった具合に、様々な種類と段階を経て、自然から抜け出す過程を進展させて来た。またつい五百年ほど前までは、われわれは情緒を基本とする生き方をしていたが、その後は理知を基本とする生き方に転換した。その結果、われわれの自然からの脱却過程は、画期的にスピードアップすることになった。今日に及んでいる。今世紀に入ってから、原子力という、一步誤れば人類が人類自身を滅ぼすこ

とも可能な能力を備えるようになり、ヒットラーやスターリンのような破壊的な人間も現われた。しかし人類の体験し、知り得たことは、現時点においても、ニュートン風によれば、幼な児が浜の真砂を一掬いした程度とも言えるわけで、われわれの周囲には尙未知の領域が限りなく広がっていることになり、このことは、裏を返せば、人類にはまだまだ前途洋々たる未来があることになる。人類は未発達段階では、集団を作ることに優れた自衛策であったが、個人の能力が発達するにつれて、集団の威力に依存せず、個人の自主性を重んじる傾向が強くなってきた。いのちは他人と共有することはできず、自分一人のものであることを考えると、社会的には、つまり集団内では、それぞれの機能を果たしながら、実存的には個人の自立と自由とが、最後の拠りどころとなるわけである。

私は今迄、モノは統制して処理する方が、分配が公平に行くと思ひ、これに反してココロは絶対に統制してはならないと、二元的に考えて来た。しかし、モノの統制権を握る、国の内外の官僚の横暴、腐敗を見せつけられるにつけて、現実の問題として、モノも統制はしない方がよいのだと思うようになった。政府が管

理するところ、ロクなことは起こらないからである。よって心身共に、凡そ統制は不可である、その理由は、統制はつまるところ個人の自主性を犯すから、と
いうのが現在の心境である。

(一九八九・一一・一九)